

# 槐

かい

岡井省二創刊

平成15年9月号

平成十五年八月二日発行 第十三巻第九号 通巻第一四七号（毎月一回一日発行）  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



# さぬきの祭

高橋将夫

炎ゆる日の頭回すに音のして  
人いきれ抜けたる後の草いきれ  
雲海に沈んでゆきし鍵の束  
水母からがんがぜまでの深さかな

天地のホメオスタシスかき氷  
遺伝子の二重螺旋よ阿波縮  
くちなはの伸びて五十歩百歩かな

夏霧さぬき四句の中の天狗と歡喜天

三光鳥しようじしようじの声すなり  
天網恢恢てのひらの蛩かな  
始まりも終りもさぬき祭かな

一省二忌一  
丸山分水

対岸へ風がしまつてをきし飛花  
片減りの靴の恙や花じまひ  
豆の花目覚めしザグザ氏の散步  
青葉冷天のクルスに鳩の糞  
鳶の食<sup>を</sup>しつひに見ざりき鑑真忌  
蟬の子やうつせみいろに暁の空  
死ぬ気などさらさらなかり蠅叩  
沖 膾 箬 袋 て ふ 一 張 羅  
大過なく生きてかなぶんあふのけに  
してやるもさせてあげるも星祭

〔注〕ザグザ氏＝カフカ「変身」の主人公。ある朝、目覚めると……

特別作品

きりぎりす牛の鼻環の金びかり  
不具合は取替へしますいわし雲  
耳澄ましをる憚りのかまどうま  
骨のゆきわたらぬ処秋がすみ  
省二の忌懸想も仏さまの内  
股間に隠すものなし八ツ頭  
月の浜呻きがこゑとなりゐたる  
灯ともせるころのしづもり水の秋  
帚木の微熱きざせる赤ら顔  
漫画家に伯の敬称梅擬

# 槐安集

市場基巳

独活の芽の摘まれ確かに誰かゐる  
うら声に鳴く蛞蝓のみたりけり  
梅雨鯉の大食をなし泡なし  
博打鳥鳴けるあたりを仰ぎみる  
浮巢見の眦灼けて来たりけり

水野恒彦

雲の峰音なき音に動くなり  
芥子の花耶蘇のうしろを通りけり  
わたつみの翳りし螢袋かな  
藜まで歩いてゆけば沙鳴く  
病葉やいろを消したる濁り川

石脇みはる

くれなゐの海月と海星遊泳す  
風なりに揺れてをりける青瓢  
青葉木菟静かになりし息づかひ  
蟬飛ぶきはに尿かけられし腕かな  
天日や切り揃へある夏木賊

竹内悦子

青葉木菟木霊は遠くありにけり  
佳き婆の般若となりし半夏かな  
弁財天に砂をもらふ瓜の花  
マニキュアのいろ濃くなりぬ夏の月  
朱雀門ほどの大きき日雷



木下野生

蟻地獄また雨の降りはじめたる  
づかづかと踏んで通つて蟬の穴  
蛇苺この先は大曲りして  
揺れてをり青葦原のひとところ  
火取虫柱時計の鳴つてをり

中島陽華

兄とあり青梅拾ひ呉れにける  
大地かすかに揺れ偽瓢虫かな  
ご寮人さん夏の小袖を着てゐたる  
菩提樹に触れ三光鳥の声  
薄日射す鴨足草なり  
いのちなが 壽

延広禎一

大瑠璃の声空にあり十牛図  
藻の花や鼓打つ裸婦笛の裸婦  
梅雨満月遊行上戸の影ゆるる  
つやつやと蘭湯を出で酒盗かな  
丹田がでかでか笑ふ初鯉

栗栖恵通子

北天に星の墓ある浮人形  
少年に潮の匂ふ螢籠  
大デコに喜雨のはじめの来たりけり  
星近き島より暮れる青葡萄  
みづかきがプールの淵にかかりをる

# 槐市集

天野きく江

飛行船ふらつとききたる落し文  
夏の野に分け入る四肢でありしかな  
影かげ面おもてに薫風いよよ濃かりけり  
紫蘇揉んで夜の真中へ入りにけり  
百歳の訃にわたつみの夕焼かな

雨村敏子

麦秋の沖や真昼の潮の形り  
地蔵川の上うへの螢多かりし  
結願の青葉闇より人のこゑ  
橋を渡りてほうたるの闇となる  
螢の闇となりけり歎喜天

秋岡朝子

青萩や露天をのぞく童あり  
柳絮とぶ似顔絵描きは色重ね  
椎の花天にブルーの水溜り  
誰待つとなく紫陽花を瓶に活く  
もじずりを屋根に咲かせて水車小屋

岩月優美子

父の日の海を見てゐる紫煙かな  
くつきりと雨後の遠山鱧の皮  
紫陽花の色あつまれば作務衣かな  
明け方の鶏茅の輪くぐりをり  
郭公の一声山の広がりぬ





# 槐集

## 高橋将夫選

南無大師遍正金剛志度詣 枚方 雨村敏子 鯨踏しんたてむ観音おはす大河かな 福岡 楠 翁

空豆を提げて讃岐のひととゐる 藁筆の墨の省浄天の川

胎蔵界金剛界豆の飯 郭公や阿蘇牛飼の塩袋

茉莉花や金銀砂子金剛杵 与太本を積んで蠅虎はごろうごもばかり

よろこびの夏書きの墨のいるとなる 夏盛ん五黄の寅の漢かな

田の神へ夏のひばりの羽毛降る 降り足りし卯の花腐し歡喜天 宗像 南 一雄

顔ふつくらと六月の菊作り 川上に幽霊くらげ流れをり

草笛やついと真鯉のよつてきし いなびかり玻璃戸へ錠の外れをる

梅 雨 茸 安倍晴明墓の前 くらげ曼陀羅我が骨とほく撒きにけり

羽抜鴨橋の傍へによれば見ゆ 歡喜地やむらさき海胆の棘うごく

愛すまい夏外套の中の裸体 明石 男波弘志 枕辺に人のをはりを藤の花 奈良 瀬川公馨

狂ふまいはんざきに水澄みはじめ 萍のぐるり一族郎党よ

帰すまい鶏を雀りにくる奴ら 木下闌われは紅毛にて候

踊るまい赤い実で爪塗りながら いぬ枇杷のうち捨てられてゐたりけり

やはらかき犀の乳房や唄ふべし 蛇苺あどけないかほ通りけり

# 銀河往来 高橋将夫

## ―俳句とモンタージュ―

映画の理論にモンタージュというのがある。モンタージュは「組み立てること」を意味するフランス語。映画で、別々に撮影されたショットを創造的に接合し、現実とは異なった、新しい時間と空間を作り出すというのがモンタージュ理論である。さまざまな顔のパーツを組み合わせて一つの顔を作るモンタージュ写真を思い浮かべるとわかり易い。俳句における配合(構成)と言ったらもつとよくわかるかもしれない。

荒海や佐渡によこたふ天の河 芭蕉

荒海と天の川の配合。誰もがよくわかると言う。ところが、「荒海」と「天の川」のところに入るものによっては、がぜん難解となってくる。このあたり、単純に言えば、季語における「つきすぎ、はなれすぎ」の議論と同様に、数量や、理屈では律せられない。

鯨鳴くゆゑ金箔の海と空 省二

「ゆゑ」で結ばれて、二元的に表現されているものの、本質的には「鯨鳴く」と「金箔の海と空」の配合。「鯨鳴く」も「金箔の海と空」も具象で、それぞれに疑問はないが、配合すると、がぜん難解そうに見える。そのまま、自然体で受け止めればよいのであるが、一つだけ付言しておきたい。「鯨」も「金箔の海と空」も暗喩。何の暗喩かは、改めて解説するまでもなからう。

よろこびの夏書きの墨のいろとなる 雨村 敏子  
すばらしい墨のいろがでた。すてきな慶事があった。いずれにせよ、すばらしさが墨の色で表現されているところがユニークである。書道家の作者なればこそ、この墨のいろ。

田の神へ夏のひばりの羽毛降る 黒田 咲子  
換羽期の練雲雀の羽が田に降った。田の神も夏ひばりの羽毛にころりと参った図。

狂ふまいはんざきに水澄みはじむ 男波 弘志  
あまり思いつめないほうがよい。でも、もう大丈夫だ。水が澄みはじめた。

鯨踏む観音おはす大河かな 楠 翁  
長江に鯨を踏む観音像あり。大河を前に家二軒ならぬ、観音さまである。鯨を踏む由来は知らないけれど、なんだか自分がこらしめられているような気がしてくる。

歓喜地やむらさき海胆の棘うごく 南 一雄  
「いま歓喜地にある」とは、故省二先生の言。この歓喜地に對し、「むらさき海胆の棘うごく」とは、よくぞ言ったと思う。

枕辺に人のをはりを藤の花 瀬川 公馨  
人は枕辺に坐り誕生を祝い、回復を祈り、そして最後を見送る。藤の花は暮春を飾る。(以下略)